2023年度 学長所信 「力を合わせて未来を拓く」

２０２３年４月

東京医科歯科大学 学長 田中雄二郎

今年度、即ち 2023 年 4 月から、私の新しい任期に入ります。

昨年の 6 月の学長選考・監察会議にて再任が承認されてのことですが、新しい任期に入るのに合せて、この任期の目標を執行部の皆さん、そして全教職員・全学生の皆さんにお話しさせて頂き、ご理解、ご協力をお願いしたいと思います。

最初に、1 期目の 3 年間を振り返り、続いて、2 期目の課題をお話しします。

今から 3 年前の 2020 年 4 月、私は学長就任に当たり、皆さんに全学を挙げてコロナに立ち向かうことを呼びかけました。それは当時社会が求めていたことだからであり、皆さんは全力でそれに応えてくださいました。病院だけでなく、全ての部局部署において取り組んでいただきました。

その時のキャッチフレーズは、すっかりお馴染みになりましたが「力を合わせて患者さんと仲間たちをコロナから守る」「試行錯誤を大切に」「責めるより応援しよう」でした。

大学としても、第一線に立つ「仲間たちをコロナから守る」ために、①PPE（防御服） を確保すること、②院内感染を防ぐために入院患者全員に PCR 検査を実施すること、③コロナ対応医療職員に定期的に PCR 検査を行うことという 3 つのことをお約束したうえで、「首都東京にあって、この感染危機に背を向ける選択肢は私達にはありません」ということを呼びかけて、ご協力いただきました。

防御服も足りない中で、自分が感染するかもしれないという恐怖と闘い、悩みながらも本当に良く戦っていただけたと感謝しております。

コロナ禍では、大学の構成員のひとりひとりが目標を意識して取り組んだことが画期的

なことでした。手術が激減した整形外科医がコロナ病棟の清掃に取り組んだり、患者が激減した精神科医が職員のメンタルヘルスケアに取り組んだり、研究者が職員の PCR 検査を実施したり、歯科技工部では当時入手困難だったフェイスシールドを作成するなど、本当に一部の例しかご紹介できませんが、それぞれの場で自発的に様々な取り組みが行われました。

その一方で、初めてのことばかりで、現場には混乱が起き、連日のように学長からのメッセージとして「責めるより応援する」を発信したこともありました。

感染現場を撮影するなど献身的な広報の努力の中、本学の取り組みは社会の大きな反響を呼び、多くのご支援を頂きました。新型コロナウイルス感染症対策基金には 1,400 件を超える総額約１億８千万円の寄附があり、それ以外にも、本当にたくさんの社会からの応援をいただくことができました。本学が社会と共にあることを再認識することとなりました。

2020 年 10 月には、本学は指定国立大学法人に指定されました。「世代を超えて地球・人類の「トータル・ヘルスケア」を実現する」を到達目標に掲げて、SDGs における「すべての人に健康と福祉を」という目標を担い社会に貢献する大学としての現在地が明確となりました。

2021 年 10 月には、医学部附属病院と歯学部附属病院の一体化を決めました。その理念は、「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」というものでした。

３年間、大勢の仲間たちの努力によってさまざまな取り組みが実現に至りましたことに、感謝してもしきれません。ありがとうございました。

ここからは、私が 2 期目の課題と考えていることをお話しします。

コロナへの率先対応は社会が求めていたからとお話ししました。

今日の医療というだけならば、一体化後の我々の大学病院は最高水準にかなり近くなったとも言えます。

しかし、本学は診療機関であると同時に、教育機関、研究機関でもあります。つまり明日の医療を担う人材を育て、明日の医療を生み出す研究を実践する場でもあります。明日の医療がどうなるかを社会に示すことが私たちには求められています。我が国は少子高齢化という点で世界の最先端にあります。我が国における医療課題の解決策は、我が国のみならず世界の課題の解決策にもなるのです。

それゆえに本学が世界最高水準の医療系大学になる意義があるのです。

世界最高水準の大学が実現していることは、本来全ての大学が大切にすべきものです。

すなわち、「Academic Freedom」（学問の自由）と、「Academic Integrity」（学問の正しさ）、「Social Impact」（社会貢献）です。Social Impact とは、純粋な知的好奇心に基づく研究も含め、社会実装に繋がる研究を積極的に展開していくことです。

この 3 つを同時に実現するためには、財政的な余裕が必要となることは言うまでもないことです。しかし、診療報酬に規定される医療や、国立大学の性格上、教育についても、飛躍的な収入増は困難です。

本学はこの５年間で産学連携の取り組みが進み、受託研究費や共同研究費など、民間企業等からの外部資金の 1.5 倍に増加しましたが、それでも充分ではありません。

また、我が国の大学発ベンチャーにおいて、主力製品・サービス関連技術分野で見ても、バイオ・ヘルスケアの割合は３割近くに上り、医療機器や素材などを含めると医工学でカバーする領域は極めて大きいことから、バイオ・ヘルスケアと医工学に注力することが、外部資金の獲得に通ずると考えられます。また、これは単に外部資金が増えるにとどまらず、社会貢献の度合いが大きくなるということです。

医工学を推進する拠点としては本学には生体材料工学研究所があり、他にも工学系の研究者も活躍しています。それを更に深化・拡大させるためには、本学と志を共にする工業系

の大学と提携する必要があります。

　折しも東京工業大学も理工系の大学としての世界最高水準への進化、アップグレードを模索していました。そして、東京工業大学が東京職工学校、本学が東京高等歯科医学校に始まるという点で、どちらも実学をベースに出発しており、共にそれぞれの分野で唯一指定国立大学法人になったという共通点もあります。さらに、教職員の数や予算規模では本学の方が大きく、学生数や土地の面積では東工大の方が大きいといった補完的関係にあり、対等の精神で統合することができるのではないかと考えました。

　かくして、昨年 10 月 14 日に大学統合の基本合意に至りました。これにより実現する統合大学は、医療、医歯学や理工学を包含するアップグレードした大学になるという決意で「東京科学大学」（仮称）と名乗ることになりました。

　　この大学統合は、社会でも大きく注目されました。先にお話しした社会課題を解決する大学としての期待の大きさを肌で感ずることとなりました。

　新しい大学の基本的な考え方は「Well-being for All を追求する」です。Well-being とは幸福を意味し、本学の「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」という理念の後半部分の英訳にも出てくる言葉です。

　「Wellbeing for All」、即ち「全ての人の幸福に貢献する」ということですが、All の中には大学の仲間たちも当然含まれます。「患者さんと仲間たちを守る」という考え方がここに活きています。

　新大学は「自由でフラットな人間関係」を目指していますが、「自由」というのは「自らに由る」と書きます。そして、「自立した財政基盤、しっかりしたガバナンスを持ち、強く豊かな組織となって、しっかりした教育研究支援ができること」、「自分だけでなくすべての人の自由が尊重されることが必要となるため、多様な価値観や異なる文化に対して包摂的であること」、「新大学のすべての構成員が、自分の役割や仕事に自信と誇りと信念を持って

チャレンジしていくというマインドセットを持つこと」、これらが新大学の「自由でフラットな人間関係」が成り立つ条件であると考えています。

第１期には「力を合わせて未来を拓く」というテーマを掲げました。これは、２期目も引き継いでいきます。

来年秋の統合を目指していますので、後１年半しかありません。「スピード」を重視して、「試行錯誤を大切に」、「責めるより応援を」、という姿勢（３つのＳ）で、「今日の」世のため人のためだけでなく、「明日の」世のため人のために進んでいきたいと考えています。

そして、新大学のマスタープランというのは、国際卓越研究大学の計画に集約されていますので、ぜひ皆さん、夢をふくらませながら、自分がマスタープランの中で何ができるかを考えていただきたいと思います。

力を合わせて未来を拓いていきたいと思いますので、皆様のご協力をぜひお願いいたします。